

主題	高齢者の生活課題に向き合う生活相談員のソーシャルワーク
副題	～ソーシャルワーク成立像の可視化による継続的な実践を目指して～

ソーシャルワーク	生活課題	研究期間	6ヶ月
----------	------	------	-----

事業所	平成26年度 生活相談員スキルアップ研修会 Aグループ		
発表者：津波古 祥平（つはこ しょうへい）	アドバイザー：林 正（はやし ただし）		
共同研究者：松沢一樹、猪股健太郎、島崎了誌、若栗信子、梅田朋子			

電話	03-5387-2201	E-mail	ooizumitokuyoh-sw@nerima-swf.jp
FAX	03-5387-2144	URL	http://www.nerima-swf.jp/

今回発表の事業所やサービスの紹介	私たちは、東京都社会福祉協議会の東京都高齢者福祉施設協議会 生活相談員研修委員会が主催する「平成26年度生活相談員スキルアップ研修会」に参加している生活相談員6名のグループです。相談員として必要な幅広い知識や調整力を養うために研修に取り組み、その中で「ソーシャルワーク」に焦点を当て研修を行っています。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

今日、社会的孤立、経済的困窮、老老介護、ネグレクト等、複雑に絡み合う生活課題を抱えた高齢者への支援が大きな課題となっている。この課題を解決する一つの方法として、社会福祉法人にはソーシャルワーク（以下、SWに略称）の機能を用いて、複雑化する生活課題を解決することが求められている。

一方、私達、生活相談員は、相談援助業務や連絡・調整業務等の中核業務を担っているものの、SWが目に見える実践行為ではないため、経験や感覚等の暗黙知/経験知を拠り所とするも、何を頼りにSWを実践すれば良いのか、悩みながら日々の業務を行っていた。さらに「稼働率」、「他部署の意見」、「自分の立場」等の要因が優先され、高齢者の生活課題に関する相談が寄せられた時、そこでSWを実践することができていなかった。

以上の課題のもと、生活課題に対し、意図的にSWを実践するため、本研究に取り組んだ。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

本研究は、高齢者が抱える生活課題に対し、生活相談員が意図的にSWの機能を果たすことを目標としている。そのために、下記のような方法で本研究を行った。

- 1) 「SWがどのようなものなのかを把握しきれていない」という課題から、文献レビューを通じて、SWの全体像・成立像の把握を試みる。
- 2) 現状を分析するため、日々の業務から事例を抽出し、SWの理論を参照し、SWが実践できているのかを確認する。
- 3) 日々の業務における高齢者の生活課題に関する相談に対して、インタビューから課題解決に至るまで、理論を参照して実践に取り組む。
- 4) 実践で得られた事例を持ち寄り、高齢者の生活課題に対して、SWを実践するために求められる要素、またそれを疎外する要素を分析し、日々の業務で意図的なSWの実践を試みることで目標達成を目指すこととした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

はじめに、SW の全体像・成立像を把握するため、SW の関連文献・論文の文献レビューを行った。SW を実践するにあたり、平塚良子らによる「7次元統合体モデル」の理論を参照することとした。この理論はSW を7つ(①価値、②視点、対象認識、③時間・タイミング、④場と設定、⑤機能、⑥方法、⑦技術)の構成要素から立体的に成立像の可視化を試みたものである。参照理由は、先行研究が丁寧に行われ、現場のソーシャルワーカーの100事例の語りから成立像を導くことで、現場での応用性を重視している為である。

次に日々の業務でSW を実践しているかを確認するため、平成26年5月1日から5月30日の期間で、各メンバー無作為に2件の事例を持ち寄り、事例検討を行った。内容は本人・家族・関連機関からの生活課題に関する相談事例とし、対話形式の記述シートを用いて分析を行った。

その後、日々の業務で生活課題に関する相談が寄せられた際は、理論を念頭に置き、生活課題解決に向けたSW の実践を行った。

《4. 取り組みの結果と考察》

本研究の取り組み結果として、研究に取り組む前は、生活課題に関する相談が寄せられた際、何を頼りにすれば良いのか不安を抱えながら日々の業務を行っていたが、本研究の取り組みを通じ、生活課題に関する相談が家族から寄せられた際には、理論を念頭に置くことで、インテークから丁寧に状況/環境を紐解き、戦略的な支援方法を家族・他部署に提示することで、共に課題解決に向けた取り組み行うことができた。

また、緊急性のある生活課題に関する相談が関連機関から寄せられた際には、同法人の他事業所や地域の関連機関と相談内容を共有することで、課題解決に向けた支援策を共に模索し、支援に結びつけることが出来た。

以上の結果から、意図的にSW を実践するために、理論を参照して、SW を実践する道筋を立てることは、生活相談員はもちろん、相談者にとっても極めて有益であると考察できる。

《5. まとめ、結論》

高齢者の生活課題に関する相談は、絶えることがない。そこで、本研究では理論を参照し、日々の業務を行うことで、生活課題に関する相談一つ一つに対し、意図的にSW を実践しようと試みた。

時には、知識・技術・経験の不足やSW の価値が他職種の意見や反発により薄れてしまった、等を理由として、具体的解決策を見出せないこともあった。この点については、研究課題として残った。今後は、継続的な事例分析を通じ、各自の成長へ繋げることを目指すことにした。

最後に、高齢者の生活課題に関する相談者は、継る想いで相談をしていることも少なくない。その想いに向き合い、生活相談員が意図的にSW を実践する試みは、生活相談員の存在意義である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、利用者・ご家族には口頭で調査内容は本研究発表以外では使用しないこと、不利益を被ることはないことを説明し回答をもって同意を得た。

《7. 参考文献》

- ・岡本民夫、平塚良子編『ソーシャルワークの技能—その概念と実践』
- ・平塚良子ほか『ソーシャルワークの7次元統合体に基づく多面的多角的実践分析モデルの開発』

《8. 提案と発信》

高齢者の生活課題に関する相談は絶えることがない。本研究を行う中、相談者が次のような胸の内を話してくれた。「『今は空いていないので…それでは失礼します』、その言葉が怖くて…相談すること、それも凄く勇気がいるのです…」と。

私達は心境をどのように受け止めるべきなのだろうか。生活課題を抱え、誰かに継る想いでかけた電話の先に生活相談員はいる。先の見えない生活を切り開くために、生活相談員のSW の実践は必要不可欠である。

【メモ欄】